

**第2回京都市総合計画審議会  
議事録**

日時：令和6年11月11日（月）10：00～12：10

会場：京都芸術センター2階 「講堂」

出席者：

**1 京都市総合計画審議会委員（五十音順、敬称略）**

赤松 玉女	京都市立芸術大学学長
安保 千秋	弁護士
小川 さやか	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授
榊田 隆之	一般社団法人京都経済同友会代表幹事
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子 <sup>※</sup>	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
田中 成美	市民公募委員
貫名 涼	京都大学地球環境学助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長/ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
藤野 敦子	京都産業大学現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授/ 京都府立大学名誉教授

以上17名

**2 京都市未来共創チーム会議委員（五十音順、敬称略）**

京都市総合計画審議会規則第3条第5項の規定に基づき召集

安野 貴博	合同会社機械経営CEO/AIエンジニア/起業家/SF作家
池坊 専宗	華道家・写真家
伊住 禮次朗	茶道総合資料館副館長
大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子 <sup>※</sup>	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
都地 耕喜	EVER株式会社 代表取締役
三川 夏代	株式会社メルカリ『mercari R4D』

以上9名

※杉田真理子委員は京都市総合計画審議会、京都市未来共創チーム会議の双方に所属

## 1 開会

### 司会（都市経営戦略監）

ただ今から第2回京都市総合計画審議会を開催する。議事に移る前に審議会委員の交代について御報告申し上げます。京都商工会議所会頭の塚本委員におかれては、今後開催予定の審議会への出席が困難となったため、本日の第2回審議会から、塚本委員に代わり、会頭代行の堀場厚副会頭に御参画いただくこととなった。

なお、堀場委員は、御都合によりやむを得ず本日は御欠席されているが、引き続き、どうぞよろしく願います。

本日は審議会委員21名中、オンライン出席を含めて17名の方に御出席いただいている。本日は、京都市未来共創チーム会議の委員を招集し、合同で議論を行うこととする。同会議からは11名のうち、オンライン出席を含めて9名の委員にお越しいただいている。また、審議会は公開で開催することとし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様に傍聴いただいている。記録のために録音・録画を行うことを御了承いただきたい。それではここからの進行は宗田会長に願います。

### 宗田会長

ここからは私が進行させていただくが、はじめに本日の議事進行について御説明する。まず、前回の審議会で審議した長期ビジョンの策定方針について、委員の皆様のお意見を踏まえた修正点等を確認したうえ、本日確定することとなっている。その後、京都市未来共創チーム委員に御参加いただき、「京都のめざすまちの姿」についてグループ討議形式で審議していく。

それでは第1の議事、長期ビジョンの策定方針について事務局から御説明いただく。その後、本審議会の委員であり、京都市未来共創チーム会議委員でもある杉田委員から、第1回京都市未来共創チーム会議の結果を御説明いただくことになっているので最初に御紹介しておく。

それでは事務局からの説明をお願いします。

## 2 議事

### (1) 資料説明長期ビジョン策定方針の確認

- 事務局から資料7「第2回京都市総合計画審議会資料」について説明

### 宗田会長

ただ今説明いただいたように、第1回審議会における委員の皆様方の御意見は、第1回御欠席の委員の方々から書面で承ったものを含め、策定方針に正しく反映されているかと思う。追加で何か御意見、御質問があれば承るが、いかがか。御意見がなければ、長期ビジョンの策定方針についてはただ今確認したとおりの内容で確定させていただく。

長期ビジョンは、「世界文化自由都市宣言」の理念を基礎に据えて議論して

いくべきものである。次なる25年間を見据えたものとなる予定であり、2050年が目標年度となるわけだが、その過程で2045年が終戦100周年を迎えること、そしてこの25年間の間に、世界文化自由都市として、平和にどう向き合うかのかということをも十分に意識する必要がある。

本日は、京都市総合計画審議会規則第3条第5項の規定に基づき、京都市未来共創チーム会議の委員をお招きしている。将来を担う若者世代の代表と、各界、各層の知見を結集した審議会が一堂に会し、京都らしさや京都のあるべき姿、そして京都のめざすまちの姿ということに関してグループ討議形式で御議論いただく。申すまでもないことであるが、こうした機会は貴重である。是非ともこの機会を活かし、豊かな議論をしていただければと思う。

それでは、「京都のめざすまちの姿」について、10月31日に開催された第1回京都市未来共創チーム会議でどのような議論があったのかを報告をいただいたうえで、議論を深掘り、発展させてまいりたい。報告いただく杉田真理子委員は、本日御都合がつかずリモートでの参加である。やりにくい部分もあるかと思うが、よろしく願います。

## **(2) 第1回京都市未来共創チーム会議の結果報告**

- 京都市未来共創チーム会議から「資料8 グループ討議資料」について説明

### **宗田会長**

それでは、ただ今の御報告を受けて、ここからの議論をワークショップで進めていきたいと思う。ここからはグループ討議の進め方について、ファシリテーターから御説明いただく。よろしく願います。

## **(3) 京都のまちのめざす姿等に関する議論（グループ討議）**

- 事務局から「グループ討議の進め方」について説明

## Aグループ

### グループ構成

#### <京都市総合計画審議会>

鈴鹿 可奈子 委員  
高屋 宏之 委員  
原 敏之 委員  
藤野 敦子 委員  
プラー ポンキワラシン 委員  
宗田 好史 会長

#### <京都市未来共創チーム会議>

安野 貴博 委員  
池坊 専宗 委員  
三川 夏代 委員

### 三川委員

第1回未来共創チーム会議において、京都は人とのつながりが大きいという話があり、関わりをつくるきっかけとして、「無計画をデザインする」というキーワードが出た。「余白」というところがキーワード。

「余白」には、物理的な場所と空気感という2つの意味があると思う。京都の場合は物理的な場所という意味の余白が少なくなっていると思う。具体的には、まちが観光地化していて、場所の目的が市民のためではなく、観光客や経済のためになりつつある。「余白」の使い方が一つのポイントになりそうだ。

「無計画をデザインする」とことと「余白」は少し違うが、「無計画をデザインする」の主語は誰であるかが重要。行政が主語になると、とても恣意的になる。主語が市民になると、「ここに余白があるから何かしたいよね」ということが自然と湧き出てきて、何をしたいか自主的に考えていくことができるのではないか。

### プラー委員

多様な人、多様な価値観の共存が重要だと思う。京都に住んでいる人、国内外から遊びに来た人、価値観は様々。価値観を認め合うまちになってほしい。言葉が分かるかどうかで得られる情報が異なる。例えば、ごみの出し方や町内会も独特のルール。海外からすると結構複雑なルールがあり、分からないこともある。海外の人をどのようにサポートし、巻き込んでいくかが重要。

### 藤野委員

私自身が今危機感を持っているのは、気候変動の問題。今年も大変暑い。人のつながりだけでなく、自然とのつながりも非常に重要だと感じる。この先、誰しもが地球環境が大きく損なわれるような状況を予測するならば、特に若い世代の人たちが安心して、子どもを産み育てたいと思えなくなる可能性がある。

ヨーロッパに住んでいた経験から言うと、海外は、若い人たちの環境問題に対する意識はとても高く、過激な抗議運動をするレベル。第1回未来共創チーム会議において、環境問題が課題として議論されておりうれしく思った。若い人が集う京都、またCOP3が京都で開催されて、温暖化に対する国際的な取組の条約、すなわち京都議定書が京都で採択されたこともあるから、環境問題の大切さを発信できると良い。伝統と持続可能性は同じ事だと思っており、持続可能な環境であるからこそ、伝統が維持されていくことになると考える。前回の会議で私は、多様性が今回のキーワードの一つになるのではないかと述べたが、多様性の中の一つとして、自然と人との共存というのは必要だ。

#### 池坊委員

京都というまちが、東京や便利な都会に追随している印象がある。住みやすくなった面もあるが、京都の良いところはローカルイズムであり、祭りや伝統文化をはじめとする灰汁の強さが入り混じっているというところ。経済発展や便利さと並行して、灰汁の強さを残した発展が必要。京都の伝統工房を回って写真を撮っていると、普段何気なく通っている道に、ものづくりの工房が立ち並んでいることに改めて気づいた。高い技術や経験に裏打ちされて文化を継続している人たちが、SNSやマーケティングが下手だというだけで衰えていくのはもったいないし、灰汁の濃さ、強さが失われたら、取り戻すことはできない。

#### ファシリテーター

灰汁の強さとは、どういうイメージか。

#### 池坊委員

京都は灰汁の強い人が多いが、自分が自分というのでなく、芯がある。時々衝突しても元に戻る。これは自分の意志はしっかりあるが、周りも見えているということ。そこが京都らしい。

#### 原委員

住んでいる人が「住んで良かった、住み続けたい」と思えるかどうかはキーワードである。その土台があったうえで、どのように外から来た人を受け入れていくかだと思う。今の京都を見た時に、オーバーツーリズムでバスにも乗れないし、(家から)外に出ようという環境になっていない。そこをどう解決するか。住んでいる人が住んで良かったとなれば、次に、(外から来た人を)どう受け入れていくかにつながる。コミュニティ、町内会が日本の良いところだと思うが疲弊している。昔は、町内会で子ども育てていたが、今は疲弊しているので、そこをしっかりと整理しないといけないと思う。そのうえで、町内会で元気なおじいさん、おばあさんたちの意見がいきてくると思う。その中で若い人たちとの調和をとることができれば、この町内に住もう、など盛り上がっていくのではないか。

#### 高屋委員

原委員の指摘どおり。先日、東山区の社会福祉関係者との会議があったが、人口減少が非常に進んでおり、東山区では25年先には小学校区がなくなっていくかもしれないという話になった。支える方も少なくなっていて、福祉にと

っては大きな問題。行政の力が必要だが、今支えている人々も年齢を重ねていくので、人口減少のことは考えていく必要がある。成長を前提とした社会構造となっているが、人口が減っていくというところを前提にしないといけない。社会福祉をやっている人間からすると、人口がどれくらい減っていくかなど、しっかり調べながら考えていかないといけないと思う。

#### 鈴鹿委員

ベースになるのは市民が京都を愛しているかどうか。住んでいる自分たちが誇りを持たなければ、ほかの人にも持ってもらえない。そのためには、理想を掲げる前に、まずは目先の問題の解決が必要。例えば、観光客の問題が挙げられるが、観光客であふれている現状を解消しなければ住みたい人がいなくなる。自分たちの生活が守られたうえで、観光客を受け入れることができる状況に持っていく必要がある。その中で重要なのは、京都らしさを計画によって制約しないことが重要。灰汁の強い人という意見があったが、一人一人のポリシーがあるというのはそのとおりであり、それを経済政策で制約しないことが重要。経済発展が、住んでいる人のためになっているのかという目線が必要。経済政策と住んでいる人のテンポがずれており、京都らしさを損ねているように思う。京都でなくても良いとなってしまうと、文化や新たなものは生まれてこないし、世界に憧れを持ってもらえるまちにはならないと危惧している。

子育て世帯に関しては、住みたいまちになるかどうか重要であるが、若い人が住みたいけど住めないまちになっていることが課題。これは本当に解決しなければならない。理想のまちをつくっても、経済面やスペースの関係で若い人たちが物理的に住めなくなると、まちの発展は望めない。京都の中心地が住めないまちになっていることは否定できないと思う。経済政策は子育て世帯や若い人たちに向けて考えていく必要がある。

また、皆さんの話を聞いていて共感したのは、文化の面で、本当はハードルが高くないのに一歩が踏み出せなくなっているというところ。ハードルが高くないのに入ってこられない。例えば、かつて子どもをお寺に連れていくことは当たり前だったのに、そこに入る敷居が高くなっている。「入ってきていいんだよ、もともとそういうまちなんだよ」といった発信が必要ではないか。

#### 安野委員

ここまで、京都に住んでいる方にとっての「良い京都」とはなにか、という視点で議論が進行してきたが、これから先、どこまでを住民と捉えるか、というのは難しくなっていくのではないかと考えている。「ずっと京都に住んでいること」が今までの住民の捉え方だったが、この30年間で人の生活の仕方が変わってきている。例えば、二拠点生活やシェアハウスなどの柔軟な住み方は、これからの25年で進行していくと思う。そうなったときに、どこまでを市民と捉えるか、重く見るべき相手と捉えるかは様々な議論があると思うが、あえて広く捉えるのであれば「関係している人」という考え方もあり得るかと思う。観光客あるいは、京都には来ていないが深く関係しているなど、ステークホルダーを広く捉え、そういった人たちとどのような関係を構築していくかを考え

直すのが一つの方向性。

また、反対のアプローチもあると考えており、京都市に関係している人の範囲の定義を極端に狭くしたうえで、その人たちをサポートするというやり方もある。どちらをとっても何かを得られて、何か失われる。「どういうまちにしていきたいか」という議論とともに、「何をどこまで失って良いのか、何を得て、何を犠牲にするのか」という議論があっても良いと思う。

### 宗田会長

私も30年ほど前に京都の外から移り住んだ。東京には住みにくいが、京都は住みやすいと思った。その理由が、住みやすい、商売しやすいことよりも、ほかに優先する何か価値観が京都の人にはある、ということ。京都の人が大切にしているものは、伝統と革新。これが分かると京都人の気質が分かる。町内会も同様。おじいちゃんやおばあちゃんが大切にしているものがある、抽象的な価値観だが、そこに協調、共鳴、共有できると京都人になれる。例えば、祇園祭は非常に閉鎖的に思われるが、保存会の存在など上手に仲間に入れる仕組みがある。そういうことに気づけば敷居はそんなに高くない。

住みやすいと思ったポイントは、感動する景色や尊敬できる人物がそこにあること。尊敬できる人の基準は、知識と技、そして態度を身につけていること。知識があっても技がある、しかしそれだけではなく、物事に対する向き合い方、態度が大切なのである。京都の人はまさにそうした態度を身につけているので、知識や技術だけに目を向けると入口のハードルがとても高く感じてしまうが、態度に目を向ければ、尊敬や憧れを抱くことができる。態度をどう分かち合うかということが重要だと思う。

### ファシリテーター

信念をもつ人が住み続けるにはどういったものが必要か。

### 池坊委員

京都は、御所やお寺、それを楽しむ教養人の存在など、長い歴史のなかで培われてきたDNAのようなものがある。態度が魅力的な人というのは、信念がある人。京都で培われ、受け継がれてきた時間の歩みに対する深い共鳴がある人たちが集まっているのではないか。

### 鈴鹿委員

否定、排除されないことが大切。ビジネスの場では、どれだけ新しい人でも、既存のものや古いものへの尊重やリスペクトがあれば、あの人は京都人だね、と受け入れられる。古くから続いている商売の人でも、他者へのリスペクトがなければ排除される。どこまでが住民かという議論にも関わるが、心意気やリスペクトがあるという部分は重要。そういう人がどのように生まれるかという、「余白」。「余白」がまちにも生活にもあると、尖った人を受け入れ、またそういう人が生まれる土壌になり得る。余裕がないと他者への尊重もなくなる。

### 三川委員

現在、東京と京都の二拠点生活をしている。2年前に、東京に住み続けることに対し違和感を覚え、京都なら住んでみたいと思い移住した。京都の「人に

対するリスペクト」は大変共感できる。ただ、実体験を踏まえると、本当の京都の内になかなか入れないと感じる。ハードルの話があったが、ここを越えないとリスペクトを感じられる領域に辿りつけない。地元の人に一生懸命話しかけて、ようやく受け入れてもらい、本音で語りあえて、ようやくリスペクトを感じることができる場面が出てくる。リスペクトを感じることは大切だが、それを受け取れる機会が少ないというのは課題だと思っている。

#### **宗田会長**

三顧の礼という言葉があるように、関係性を築くということは、少しずつ何度も関わりを持つということだ。京都の人は何回尋ねて来たか覚えていてくれる。「去年も来てくれましたね」と言ってくれたり、こちらのリスペクトを受け止めてくれていると感じることがある。

#### **藤野委員**

京都にはフランス人が多く在住しているが、中に入っていくハードルがありつつも、フランス人が京都を好むのは、自分らしくいられる、寛容さがあるからだと言ったことがある。また、京都には、西欧諸国には見られない、革新と伝統という一見すると相矛盾するものが共存していることも魅力らしい。近代的な都市空間の中にも一歩踏み込めば、自然や伝統がある。これは驚くべきことのようなのである。こういった矛盾が単なる矛盾として存在しているのではなく、調和している点が京都の魅力であり、この点をどうアピールするか。フランス人は言われなくてもそういった京都の魅力に気が付いているのだと思う。

#### **鈴鹿委員**

京都の人間関係はダンジョンのようだ、と言われたことがある。必ず誰かと誰かがつながっていて、最終的に会いたかった人と会える確率が高い。これは京都のつながりの強さを示しているが、だからこそ入りにくさはあるのも確か。

#### **三川委員**

適切な入口を見つければ良いのだが、その感覚を研ぎ澄ますまでが難しく、慣れが必要。

#### **宗田会長**

それはパリでもフィレンツェでもそうであり、歴史都市と呼ばれるようなまちには共通する特徴だ。

#### **三川委員**

それは、京都の面白さの部分でもあると思う。

#### **高屋委員**

「京都の昼寝」という言葉がある。これは、ぼうっとしていても良いので、とりあえず京都行って住んでみなさいという意味。今、子どもたちにも余白がない。小学校にも余白や余裕がない。ぼうっとしている時間がない。私たちは、このぼうっとしている時間にいろいろと遊んだ。子どもの時代からこんな感じだと、ちょっと大変。

#### **ファシリテーター**

京都の魅力を外の人が感じ続けるためにはどうすれば良いか。



## 安野委員

おもしろいと思ったのは、「入口を探すことが難しい」というところ。根気強く、京都に対しモチベーションがありそれ自体を楽しめる人は、そこが面白いポイントだが、ちょっと興味があるだけの人には、入口を探す難しさによって離脱してしまう要因となっている。

例えば、世界一難しいまちとして差別化していくという方向もあれば、新しく入って来る方に分かりやすくして、京都を分かっていただけの人を探すという方向性もある。どちらの方向に進んでいくかの選択。

## 宗田会長

京都は、入口さえ見つけられると誰でも入れる。東京は見つけても扉が閉じてしまっている。入ってしまえば、東京よりも京都の町内会のほうが平等に受け入れてくれる。入口を見つけ出しさえすれば誰でも入れるという自由さが、まさに世界文化自由都市宣言につながる。

## 藤野委員

安野委員のおっしゃった、排除するほう（世界一難しいまち）の差別化を選択する方が、一見矛盾するように思えるが結果的にまちが開かれることになるのではないかと思う。

## 原委員

一方で、人口が減っている現実も考えなければならない。京都に住んでいても、親が子を京都の大学に行かせることが少なく、京都に就職させることも少ない。とにかく稼がないといけないので、都会に行かせる。例えば、結婚するとき、子どもが生まれるとき、子どもが小学校に入るとき、などのタイミングでいかに京都に帰ってきてもらうかが重要。根っから京都の人たちの下の世代が出ていっているのは現実なので、出て行った人にいかに帰ってきてもらうかだ。大学のまちなのに、ほとんどの大学生が京都に残らない。

## 宗田会長

就職は確かにそのとおり。大学生が全国から集まるので羨ましがられるが、一方で、就職しないのは、あまりにも大学生が多すぎるから。

## 原委員

歴史や観光はあるけれど、住むとなったら物価が高いため、宇治や大津などの近隣に住み、定期的に京都に来るような形になっている。

## 宗田会長

子育てが終わった方や定年退職した方が戻ってくる傾向にある。

## 鈴鹿委員

その世代だけではやはり難しく、若い世代に住んでもらうということが必要。経済面などの現実的な問題も解決しなければならない。

## ファシリテーター

生態系や気候変動の視点から、住みやすいまちにするにはどうすれば良いか。

## 藤野委員

マンション開発が盛んで不安に思う。全国的な潮流なのかもしれないが、自

然がどんどん開発され、マンションが立ち並ぶようになっている。行政は「まちづくり」を考えずに無制限にマンションを建てる気なのか、と不安になる。長期的な視点でまちを守ることができているのだろうか。

#### 宗田会長

京都市は適正な価格で住むことのできる場所が足りないことから、むしろ開発を誘導している部分もあるが、不動産業界からしたら高さ規制等、規制が厳しいので家が建てられない。一方で、洛西ニュータウンなどは空き家が目立つ。こういう矛盾の中で、バランスを見ながらやっている。全国的に見れば、かなり丁寧なまちづくりをしている方だと思う。

#### 藤野委員

建物はコンクリートばかりで、自然空間、緑地を取り入れているところが少ないように感じる。

#### 宗田会長

それは確かにそのとおり。ただし、烏丸通において木造でマンション建てる等、動きがないわけではない。

#### 藤野委員

自然環境の持続可能性を実現するためには、一人一人が自分事として関心を持たないと解決しないが、日本は残念ながら関心度が低いように思える。京都ではCOP3の国際会議もあった。他都市に比べ環境への意識の高さが市民の特徴ならば、未来にも継承すべき重要なことと感じる。

#### 池坊委員

自然が減ったため、自然に生えている草花を生けることも減った。そういう体験がないと、京都の良さを語るにも説得力に欠ける。

新しく来る人にルールや規範守ってほしいと考えるが、カルチャーや宗教が異なる人に、生活するうえでの精神的な負担が積まれていくのもどうかと思う。皆に規範を求めるのは難しい気もしていて、全く違う価値観の落としどころをどう探っていくかが難しい。

日本人が日本のルーツや体験に対して希薄になっているというのは感じるが、京都は多国籍で、多文化の共生の都市にもなって欲しいと思っており、コスモポリタンのビジョンへの期待もある。多様な文化を受け入れ、共生しながら京都の文化も守っていくような、緩やかな循環のシステムが生まれると良い。

#### 鈴鹿委員

子どもが一人で遊びに行ける場所が減っている。公園も狭くなり、治安の問題もあって勝手に遊びに行かせるということとはできない。場所や生活リズムの問題、町内会が希薄になっていることも要因。昔は、町内会など地域のコミュニティで子どもを見るというのが子育ての在り方だったが、今は、親がいない時間は習い事に行かせるように変わっている。町内会が活発でない地域は、全てそのように変わっていくのだろう。

## ファシリテーター

町内会は、2050年にはどうなっていくべきか。

### 原委員

町内会は、残しつつも足りないところは別のものを活用していくという在り方が考えられる。人と人とのつながりは大切にすべきなので、コミュニティの復活は必要。町内会や自治会でなくても良いが、そういう役割、つながりは残していく方が良い。自助努力されているところもあるので、うまく融合できれば。

### 高屋委員

町内会の難しさは、町内会長をはじめ役員への負担が大きいというのが一つある。太秦地域では、地蔵盆を半分の町内会しか実施していない。子どもたちはいるが、地蔵盆を支える町内会の力が落ちてしまっている。町内会長のマインドを起こさせるようなことも必要になってくる。負担感から、自治会の加入率が5、6割になってしまっているが、存続するべきだ。私は、新しく家が建てば、町内会に加入するようお願いに行くが、マンションのような集合住宅的なところには勧誘に行けない。

### 藤野委員

日本の働き方の問題が大きい。誰しものが地域の人とつながったり、育児、介護などケアに従事したりする権利があるにもかかわらず、長時間勤務等により、真のワーク・ライフ・バランスを実現できないという企業社会における働き方が深刻な問題なのではないか。

### 鈴鹿委員

中小企業は働き方に融通が利くところが多いが、大手の企業のほうがさらに手厚い。中小企業はそれに太刀打ちできずに、人が大企業に流れ、人員が不足してしまう。柔軟な働き方ができるのにも関わらず人員不足で、一方で、大学生は京都に就職先がないという。このギャップが埋まって欲しい。

### 高屋委員

中小企業、零細企業が減っている。町内からも商店が減っている。以前は、零細企業の社長が町内会長を務めていた。零細企業がなくなっている、ということも原因。

### 鈴鹿委員

実際に地域のお祭り等、自社でも手伝っていた。

### 原委員

地域を支えていたまちのクリーニング屋やたばこ屋がなくなり、だんだんコンビニになってきた。それは受け入れるべきだが、そういう世の中になったうえで、どうすべきか。

### 三川委員

私は地域と関わっていない分、誰とどうやって関わって今の生活を補っているかということ、SNSである。地域のコミュニティでやっていたことを、一部SNSで補っている部分がある。地域と関わることで得られるものとは何なの

か。SNSで価値観の合う人が手軽に見つけやすくなった分、地域と関わらなくても生きていけるという感覚がある。京都の地域コミュニティの良さを理解出来たら、自らコミュニティに入りに行くのでは。

#### **安野委員**

人が不足していく中において、AIや技術が果たせる役割は大きいと思っている。さらに、京都には優れた大学がたくさんあり、IT企業や、「任天堂」や「はてな」をはじめとする企業も集積しており、科学技術と京都には密接なつながりがあると思う。スタートアップやベンチャーの起業は、この100年で見てもずっと行われていること。京都の伝統産業も、起業当時では革新技术だった。人不足の問題や、人と人のコミュニケーションの形を変えていく、というところを京都から展望するのも良いのではないか。

#### **藤野委員**

近年、災害が増えているので、最低限、隣近所とつながることは大切。SNSだけで全てを解決できるとは限らない。外国籍市民の方も同じだと思う。

#### **高屋委員**

町内会は絶対に入らなければならないものではないが、重要なのは、防災。地域のことをどう守るかとなると、みんなで力を合わせて守る。小さいことかもしれないが、町内会や自治会は防災という意味も含めて重要。

#### **鈴鹿委員**

私自身、地域に根差している方だと思うが、地域とつながる良さについては子どもが生まれるまで全く考えていなかった。地域のつながりの良さは、治安、安心面。子どもが一人で学校に通うようになってからも安心感があり、子どもも様々な大人と挨拶することで大人慣れし、挨拶や会話ができるようになってきた。

#### **宗田会長**

一人暮らしで結婚、子育てをしない人は4割を超えている。これだけ一人暮らし世帯が増えた現在、地域や人との接点をどうつくるか。これからの25年間で状況はさらに変化していくだろう。

#### **プラー委員**

私が来日した30年前と今では、経済状況が全然違う。今までは、経済大国の日本に海外から留学・労働のために人材が大勢来たが、現在は留学・労働先として日本以外の選択肢も出てきた。その中で良い人材に日本、京都に来てもらうには努力が必要になる。

今後、京都の大学も減っていく可能性は高くなっていく。どうやって海外から良い人材に来てもらうかということが重要。外国人が日本に住むためには在留資格が必要になるが、留学、結婚、就労くらいしか種類がない中で、いかに日本、京都に来てもらうかを考えなければならない。

京都は、入口を見つけたら居心地よくいられるという話だが、留学生は入口を見つけれない。そういう接点を作るためにどう工夫していくかが重要だ。

### 池坊委員

町内会はもっと図々しい側面があっても良いのではないか。子育て世帯、年を重ねてから京都に戻ってくる世帯は、コミュニケーションを求めて町内会に対するモチベーションが高いが、単身世帯、留学生は関心があっても入口が分からないし、入りづらい。図々しく押し付けるアプローチがあっても良いのかもしれない

### 藤野委員

町内会自体もいろいろな意味で、時代に合わせて変化していかなければならないと思う。コミュニティのまさに「空間」での助け合いも重要だが、一方でSNS、IT技術を併用して、コミュニケーションをしたり、効率化を図ったりすることも重要だろう。

### 高屋委員

(SNSやIT技術を)取り入れつつある。お年寄りが多いが、それでも半数程度はLINEを使用できる。

### 池坊委員

今はそうしたことの過渡期なのかもしれない。

### 宗田会長

「過渡期」というのはポイントかもしれない。

## **Bグループ**

### **グループ構成**

#### **<京都市総合計画審議会>**

赤松 玉女 委員  
曾我 謙悟 副会長  
阪部 すみと 委員  
田中 成美 委員  
松井 道宣 委員

#### **<京都市未来共創チーム>**

伊住 禮次朗 委員  
大井 葉月 委員  
杉田 真理子 委員

### **曾我副会長**

先程の報告を受けて印象的であったキーワードは「消費されるまち」。こう聞いて想起されるものとして、例えば「観光」などがある。京都のまちが「観光」の対象として見世物のように扱われることが「消費されている」という感覚に結びつくのはよく分かるし、実際に「観光」に起因する問題も色々とあるわけだが、他方で、一概に観光に来ないで欲しいとはならない。こういった場合には、京都のまちと「観光」がどう共存していけるかを考えることがより建設的だ。しかし、「消費」の対置として観光客に何かを「生産」してもらわなければならないのも違和感があり、「観光」を消費するだけではないものとするためには「京都を知ってもらおう」ことが重要なのではないかと。

そこで、京都の何を知ってもらおうかというときに、私は二つあると思う。一つは、京都というまちが西洋の技術を積極的に取り入れ、先駆的に近代化してきた都市であるということ。日本は、戦後、西洋の技術をいち早く取り入れて近代化してきた国で、京都はそういう部分が極端に出ている。今、世界中の国が近代化、発展しているが、そうした近代化の流れの中で日本、そして京都が何をしてきたのかということを知ってもらうことが重要である。もう一つは、京都が衰退と復興を乗り越えて今に続いているということ。京都は1000年以上続く古い都市だが、歴史の中で繁栄し続けていたわけではない。東京・京都のときもそうだが、衰退と復興を経験してきたまちなのである。そうした経験は、今、世界中で戦争や自然災害の脅威が鮮明化する中において重要である。単に長く続いているという表面的な部分だけでなく、京都というまちがどのように危機に向き合い、復興してきたのかを伝えることができると、もう少し深みが出てくると感じた。

### **伊住委員**

茶道は室町時代から続いている伝統文化だが、その歴史のなかでも様々な近代化を経て今に至る。例えば、江戸時代から明治時代に切り替わるタイミングで京都から都が移り、衰退する京都を何とかするために京都博覧会が開催され

た際に、当時家元であった裏千家の11代目が、海外の賓客のためにイスとテーブルを用いた「立礼」（りゅうれい）という新しいお茶の形式を考案したのもそう。春の風物詩である「都をどり」のときに芸舞妓さんがお客さんにお茶を振舞う立礼はその当時考案されたものが今でも使用されている。近代化を取り入れるということは伝統文化の世界でも起こり得るものだという事である。それに、近代化以降に生まれた新しいお茶の形も150年くらい経つと伝統文化と感ずるようになっていく。

消費されないまちづくり、観光客にどう関わってもらおうと良いのかという話について、観光問題に起因するデモが発生したバルセロナ等のように、観光客を排除しようとする動きが世界の大都市でも生じている。京都でそうした暴動が起こるとは思わないが、観光客が京都に何かを残してくれているという感覚が市民にないのは事実。交通の麻痺など生活への影響に苦しさを感ずている市民が圧倒的多数だと思う。他方で、観光客も決して京都の文化を消費してやろうと思って来ているわけではなく、京都を守ることに貢献したいと思っている人も大勢いる。例えば、京都の誇りである文化財が、京都を愛する人が大勢観光に来てくれるおかげで保全されているというようなプラスの側面を、市民が理解できるような形で伝える仕組みが必要。外から来る人と住んでいる人の関係を紡いでいくためには、文化財をはじめ、そのまちが大切にしているものを互いに守っていくという考え方が重要である。確かに直接何かを生産してもらわなければならないが、有意義に関わってもらおう方法としては、そうした仕組みが重要であるというのが第1回未来共創チーム会議でも大きなトピックになっていた。

#### 杉田委員

第1回未来共創チーム会議の議論で特に印象的であったのは、成長志向に対する問題提起であった。この点については深掘りしたいと思っている。今後、人口が減っていくことが明らかな中で、人口増加や、更なる成長を志向して良いのか。今あるものが減少していく中で、また、していった先でどう豊かに生きていくのかを考える必要があるのではないか。どうしても都市のデザイン、これからのまちの在り方を考えるときに、拡大・成長という部分が重視されがちだが、そうではない都市の在り方を考えていきたい。

近代化、先進都市というキーワードについて、私自身が都市デザイナーとして活動する中で、西洋型のいわゆる近代都市の規範的な部分が見えてきている時代になったと感ずる。例えば、近代都市においては、気候変動や環境破壊、まちの均質化などの問題がある。あるいは、自動車中心になり過ぎて人間が徒歩や自転車移動しづらいなど、まちのデザインがヒューマンスケールからかけ離れている。こうしたことを背景に、近代都市の限界がグローバルに議論されているのが現状。日本独自のまちの在り方、ひいては京都独自のまちの在り方について、欧米の都市デザインに追随するだけでなく、どのように独自の未来をデザインしていくのかという議論が重要になる。

## ファシリテーター

まちの均質化に対する日本、京都独自のまちの在り方は、まさにこの場で議論すべきところ。例えば、成長の在り方を考えるうえで、芸術がどうあるべきかという観点で赤松委員はどうお考えになるか。

### 赤松委員

芸術は消費されるだけのものではなく、時代や地域を越えて価値が認められ、人々を豊かにするものであり、成長志向の社会の動きとは異なる方向性をそもそも持っている。日本初の自治体直営オーケストラが京都で生まれたことや、まだ価値の定まらない人々を育てていく姿勢で芸術活動を支えてきたことは、まさに京都というまちの在り方を象徴していると思う。まちの均質化に対する危機感については非常に共感できる。芸術大学の存在意義は、まさにそうした均質化の圧力に抗える人を育てるというところにあるが、実際は、若い人に厳しい社会になっていて、特にアートを志す人には難しい状況に置かれている。芸術家を育てるというのは、大学を卒業して就職したらおしまいというものではない。この点は我々大学も強い課題意識を持っている。芸術大学を卒業し芸術家を目指して頑張りたいという思いを、行政としての京都市が支えることはもちろん、京都のまちの人々も自然に理解し、支えてくれるような社会になると良い。かつては、貸画廊が沢山あってそこを回るお客さんやジャーナリスト、関係者がいて駆け出しの芸術家を支えてくれていたが、地価高騰で維持が困難になり数を減らしつつある。新しいところがあっても学生たちも経済的に気軽に借りられないという辛さがある。昨今は、芸大を卒業した学生たちのキャリア形成が東京志向、あるいはいきなり海外志向であって、出だして挫けてしまいがちである。そういうときに支えてくれるのが貸画廊であり、そうしたネットワークや場所に支えられながら自分のやり方でゆっくり進んでいくのが望ましいのだが、今はやや逆行していると実感する。芸術家になりたい人がまちにいて、それをまちの人がおもしろがって見てくださるということが、未来共創チーム会議の議論ともつながるのではないかと感じている。

## ファシリテーター

ただいまのお話は、「消費だけではない」観光の在り方、関係性の作り方のヒントになるようにも感じた。

### 赤松委員

海外だとアーティスト・イン・レジデンスの形も多様で、著名なアーティストに向けたものだけではなく、様々な形態のレジデンスがある。観光がてらその都市に行って制作するというようなハードルの低いものもあると思う。

昨今の学生たちのキャリア観としては、若くしてマーケットに乗るようなギャラリーに認めてもらうことを至上としていると感じる。要するに売れることを成功だと捉える価値観である。大学としてもそれだけが価値ではないと教えてはいるが、例えば、子どもの数が減り、小中高校の美術の授業時間が減ると非常勤講師の数も減るので、教えることに価値を見出そうにもポストがない。かつては、次の世代に美術を教えながら夏休みにしっかり制作して、貸画廊を



借りて発表するという緩やかなアプローチができた。これからはまた少し違う形で、例えば、小学校の空き教室をレジデンスとして活用し、アートの現場に子どもたちや親御さんが触れられるように取り組んでいる。さらに、在宅が増えた企業と連携して、企業内レジデンスなど取り組めないかと考えてはいるのだが。

### ファシリテーター

少し話題を転換するが、人材の観点からお話を伺いたい。医学を志す学生が京都の外に出ていくというようなこともあるか。松井委員の御意見を伺いたい。

### 松井委員

京都大学や京都府立医科大学は、医学を志す全国の学生がこぞって志望するほどレベルが高い。地元の学生が入学できないくらい、全国から多くの学生が集まる。では、集まった学生が京都に定着するかというとそうでもなく、どの都道府県でも地元の学生が地元の大学で勉強してそのまま地元で医者になるというのが一般的だが、京都の場合は、地元の学生より全国から来ている学生が多いので、卒業生の多くは地元に戻るか東京へ行き、なかなか京都に定着してくれない。看護系や技術系も、京都の大学は全国の学生が目指す大学となっている。とはいえ、医師を目指す京都の学生は地方の大学に行き、卒業して京都に戻ってくる場合も多いので、京都市の医師数は一定確保されてはいる。

全国的に見て京都は「安心」や「ブランド力」があることも、京都に多くの学生が集まる要因であり、京都の独自性だと思う。女子学生の親御さんも、京都なら安心だから下宿して大学に通うことを認めるという話もあるくらい。親御さんにとっては、子どもが京都の大学に通っていると胸を張って言える。京都には多くの人材を呼び込むポテンシャルがあるが、集まった人材を保持できているかということそうではない。

京都は様々な面で他の都道府県と比べて良いとされる。例えば、人口10万人当たりの医師数は、現在京都府が全国で最も多く、京都は資源的に恵まれているといえる。その他、文化も京都の強み。京都の人はお茶会などで着物を着る機会があるが、他都市ではあまりない。これも京都の独自性であると思う。お茶の文化があるから着物を日常的に着る文化があり、お花や和菓子などの文化がそれぞれ関わり合って進化してきたのが京都の文化の独自性、強みであり、これを伸ばしていくことが重要。

観光、大学、文化、宗教などが京都の強みであり、こういうところを伸ばさないといけないのだが、今は逆にそれが問題になっている。一つは、未来共創チーム会議の議論にもあったが「キャパシティ」。強みを伸ばすには、同時にキャパシティをどう考えるかを議論しなければならない。

また、医療に携わる立場から申し上げますと、今後の人口減少は、社会に極めて大きな変化をもたらすと考えられる。例えば、本日の会場となっている京都芸術センターも人口減少の結果、小学校としての役割を終え、現在は別の用途で活用している例の一つだが、今後の人口減少社会においては、社会資源をどう再利用していくかというのは重要なテーマになっていくはずである。観光客

の受入れや高齢者の支援など、京都のキャパシティや包容力を高めていくうえで、地域の社会資源を多様な用途で再利用できるよう考えていかなければならない。潰して新しく施設を作るのにはコストがかかる。古いものと新しく必要とされるものをどうマッチングさせていくかは、大きなテーマになってくるはずだ。

#### ファシリテーター

地域資源を有効活用していく、姿形を変えて使っていくということは、グローバルなテーマだが、京都らしいかし方は。

#### 松井委員

私は中京区に住んでいるが、京町家がたくさん遺っていて京都らしい街並みだといわれるが、実際にはそうでもない。バルセロナやパリ、ロンドンに行くと、昔ながらの伝統を感じる。京都もそういうものを意図的に遺していかないといけない部分だと思う。その中で、これから何が必要とされるのかということとマッチングさせながら、これだけの建物、資源あるので、どう利用していくのかというアイデアが必要である。

#### ファシリテーター

若い世代の人が循環するののかということが一つ大きなテーマだと思うが、若い世代から見た京都の魅力は何か。田中委員の御意見を伺いたい。

#### 田中委員

京都にはブランド力、住みたいと思わせるものがある。一方で、私自身、学生時代に京都で暮らしていた時と、現在再び京都で暮らして抱く感覚は大きく異なる。交通の便は悪くなった。観光客が多くバスに乗れない、駐輪場は空いていないなど、日常生活の支障は以前よりもはっきりと感じている。家賃や物価の高騰など経済的な面で住みたいと思っても住めないという問題もある。また、京都には大学生が多いが、卒業の時点で奨学金返済の負担を背負い、これからどういう時代になるかも分からないという不安も抱えている学生も多い。個性を受け入れてくれる、伝統があるということは魅力だが、2050年を考えると、今が豊かじゃないと先のことは考えられないというのが若者の本音ではないか。こうしたことが良くなる可能性があれば、若者も住み続けられるのではないかと感じる。

#### ファシリテーター

逆に10年前より良くなっているところはあるか。

#### 田中委員

コミュニティの考え方が深く残っているところはとても良いところだと思う。まちが狭く、ご近所付き合いのような関係性が残っていて、名前を言うとか知っているということも多い。以前の自分はそういう狭さを広げたいと思っていたが、今はそういう人の気配があるところは心地よく感じていて、昔ながらのつながり、コミュニティが遺っているのは財産であり、魅力だと思う。

#### 伊住委員

お店に行くと、「あなたのお父さんがよく来ていたよ」などと言われること

もあったりする。世代を超えて、杉田委員がおっしゃっていた「ヒューマンスケール」が通用するまちのサイズ感というものがあると思う。

#### **田中委員**

人と人が会話して買い物ができる。デジタル社会に振り切れた現代社会だからこそ、人のつながりの温かさが大切だと感じられる部分が京都には残っていると感じる。

#### **ファシリテーター**

そうしたコミュニティに異質な人を迎え入れるときには一定の苦労があると思う。阪部委員の立場から、既存のコミュニティに新たな存在を受け入れるとき、京都の懐の深さ、あるいは狭さについてどうお考えになるか。

#### **阪部委員**

私はLGBTQのコミュニティを運営している。京都で運営するコミュニティには、女性同士で子育てしている人がいて話を伺うと、自然な形で近所付き合いができており、女性同士で子育てをすることに奇異の目を向けられないという。私自身の住まいは大阪だが、大阪のコミュニティではそこまで包摂性は見られない。その辺りは京都の特徴だと感じる。同性カップルが子育てをするのは社会でまだ一般的ではないにもかかわらず、自然に受け入れていることが京都の良さであり、多様性、新しいものを受け入れていく土壌を伸ばしていくのは重要な視点だと思う。

#### **ファシリテーター**

西洋化に代表されるような京都の変化する力が、受け入れる力も広げているということかと思う。

#### **阪部委員**

元来外国人や学生が多く、多様性豊かなまちであるというのがベースにあると思うが、そういった京都の魅力は伸ばしていくべきところだと感じている。

#### **ファシリテーター**

大井委員は東山区の職員として、地域コミュニティの良い面も悪い面も実際に目の当たりにされていると思うが、コミュニティの多様性や包摂性に関する魅力、あるいは逆に受け入れていくことの足枷、閉鎖的だと感じるところはあるか。

#### **大井委員**

私は行政区職員として地域に携わることが多いが、東山区は、オーバーツーリズムはもちろん、人口減少、高齢化といった課題の最先端をいっている。業務で人口減少対策に取り組んでおり、お試し居住の取組として最初にアーティスト・イン・レジデンスをやっていた。海外の人に芸術を使って発信していただくという取組であったが、その取組に更なる展開があったらよかったと感じている。

実態としては、観光客に対する地域の方の拒否反応が非常に強く、課題だと感じる。11月と3月は通勤にも苦勞するほど道が混雑する。コンビニに買い物に行っても、すごい行列ができていている現状なので、ごみや混雑といった京都

の悪い側面が取り上げられてしまう。冒頭で「京都を知ってもらおう」という話があったが、現場にいと、世界中の人々に、観光に行くだけではないということを知ってもらおうことが重要だと感じる。

#### **ファシリテーター**

観光だけじゃないというのは、京都の本当の魅力ということだと思うが、例えばどのようなものがあるか。

#### **大井委員**

地域のコミュニティだと思う。実家暮らしをやめて、中京区で一人暮らしをしているが、休日に荷物を持って歩いていると、地域のおじいちゃんから「引っ越しか」と話しかけられる瞬間などは京都らしいなと感じる。生まれてから25年間京都から出ていないが、そういうところに京都らしさを改めて感じる。

#### **ファシリテーター**

意見交換が一巡したので、さらに何か補足しておきたいことや追加の御意見などを伺っていきたい。

#### **赤松委員**

海外でもオーバーツーリズムのまちはたくさんある。建物を文化として遺して発信したりしているが、観光してもらっただけではなく、観光客に知ってもらっ取組をしていると思う。例えば、イタリアでの経験だが、ヨーロッパの大学生が行き来しており、日本語学校がたくさんある。そのエクスカッションなどでも、一般的な観光ではなく、都市のことを深く知るようなコアなツアーを学生がやっていたりする。京都で文化に触れるには言語のハードルは高いが、日本語学校の生徒やリピーター・ツーリストのための案内、バカンスを利用して日本語を学ぶプログラムなど、そういうのはどれくらいあるのか。オーバーツーリズムと市民が共存していく形があるのではないかと思うが。

#### **曾我副会長**

市民と観光客が話す機会はないが、話してみると思っていたのとは違うと気付くことがあるはずである。例えば、海外から来る若い人は、マンガやアニメの影響もあり、日本のことを良く知っている。最近の若い人たち、学生はかなり英語ができると感じる。学生のまちでもあるため、関わりを持ちやすそうだが、お互いに話す機会をつくる仕掛けが必要だと感じる。

#### **赤松委員**

そういう場があると、ツーリストとの関わりが出てくる。英語は共通言語化してきており、バスの運転手や地下鉄の駅員も英語で説明している。そういう取組は良いと思うが、もう少し深く京都を愛してもらっために、京都のおもしろさを知ってもらっために、ちょっとした日本語講座的なことや、海外の人がもっと知りたくなるようなものがあると良い。昔は道を聞かれることもあったが、今はスマホで何でも調べられるので、実はきっかけが減っているのかもしれない。そういう関係性の復活、あるいは創造ということを考えても良いのかなと思う。

## ファシリテーター

観光名所をネットで調べて京都を知ったつもりになるのではなく、調べて分かることが京都の全てではないということに気付いてもらうことが重要であるとの視座かと思う。

## 赤松委員

芸術に携わる立場からすると、西洋美術史を学んでその場所に行ってみたい、知ってみたいと考えるが、海外の人にとって日本は、日本史はほとんど知らないし、目に見える部分だけで、これだけ観光客が来ても実際深くは知られていないのかもしれない。知ってもらうための入口がまだまだ足りない。実際に京都を訪れてから初めて知るのも良い。こういうまちだったのだと知ってもらって、次はこういうところを見てみようと思わせる仕掛けがあれば良い。1000人来たうち、10人でもそういう感覚を持ってもらい、発信力になっていただけることを期待している。

## 杉田委員

私の中で深掘りしてみたいと感じているのが、古いものを遺しつつ、新しいものをどう取り入れていくのかということである。例えば、本日の会場になっている芸術センターは、かつて小学校だった建物をリノベーションして、アートの場所になっている。私は空き家問題にも関心があり、浄土寺でまちづくり活動をしていると、活用できる場所、文化的に価値のある建物はたくさん残っているのに、どう調べても物件のオーナーが分からず手を出せないことが多い。空き家税の導入もどういう方向に転ぶかは分からない状況である。著しく混雑しているエリアがある中で、場所や建物に対するニーズが多くあるにも関わらず、現状で非常に多くの遊休不動産が存在していることに疑問を感じる。価値ある建物が更地になったり、駐車場になったりしてしまうことが日常的にあり、街中を自転車で走っていると週に数回は残念な思いしている。どうしても日本人は完璧主義で、文化財はお金をかけて1つのものを完璧に直すことがスタンダードになっている。そうすると街並みは全体としては変わっていかない。結果として、文化財級の町家の横にコンビニがあつたりするような、街並みのちぐはぐ感が生まれている。完璧なものを1つ作るより、ベターなものを10つ作る方が、街並みとして良くなるのではないか。そうすると観光客も局所的に集まるのではなく、全体としてまちを楽しむことができる。

## 伊住委員

今話を受けて、一例として茶室を挙げると、茶室だけを保存しておこうという話が出るが、その周囲にあるものが無くなると、使えない茶室はある。市内には、そうした実際にお茶会では使えない茶室も少なくない。それは、完璧に1つ遺そうとして、結果として遺跡としてしか残っていない、生きた生活文化財として遺っておらず、実際に使える茶室は目に見える状況よりも少ないという指摘もできる現状。完璧な形で、当時の姿を遺すことも大切なことだが、人が出入りできる、使えるような場所を遺すために、ベターを許容して、たくさん遺す形も必要だと感じた。

また、古いものが無くなっていく残念さは、京都に失望する1つのポイント。かといって、近代以降に新しく建てられた建物にも素晴らしい建物はたくさんある。モダン建築が最近流行っているが、新しくできる建物も京都の魅力を紡いでいくものであるべきで、古いものを遺すことはもちろん、新しい建物や街並みも京都の魅力につながるものとなることが重要なのだが、そういうところに都市としてのキュレーションが働いていないように感じる。世界の観光都市にも近代以降にできた都市環境がたくさんあるが、景観に都市としての美学が働いている街並みは歩いているだけでも心地よい。新しく創り上げていくものに対して、京都市の考え方はこうで、少なくとも、心地よいまちにしておくためにこれだけは統一するというハードルが必要なのではないか。これから建物を建てる人には制約になるかもしれないが、都市環境全体としてはそういう必要な議論なのではないかと思う。

### ファッションライター

何かを完璧に遺すという発想も間違っていないが、京都に合っていないという視点は確かにそうだと思う。京都の基準はグローバルとは違うということ、京都が示す価値観、考え方、物差しが根底にあるかと思う。京都が未来の世界に示していく基準、価値観とは何か。

### 松井委員

観光客がたくさん来て、バスに乗れないとか買い物ができないといった具体的な害はあるだろうが、京都の人にとっては、京都の暗黙のルールを理解されないのが、最も腹立たしいのではないか。例えば、京都の人はいけずとか言われるが、決してそのようなことはなく、むしろ包容力がある。人の出入りが繰り返されて京都の今の文化ができていく。学生や観光客を拒否しては、これから取り残されていく。そういうことを積み重ねながら、新しい京都をつくりあげていく中で、外国人に馴染んでいくというよりは、京都らしさにこだわるといって一定のルールを守らないといけないと示せるような仕組みがあれば良い。京都に来る前に心構えを知ってもらおう。かつて日本人が欧米に旅行に行き始めたときは、現地の人から同じように非難されていたが、今は京都で同じようなことが起こっていて、我々はそれを忘れて非難している。みんなで受け入れていくためには、京都のルールをどう伝えていくか。言葉の教育と同時に、京都に来たら京都のルールはこういうことだと示せば理解してもらえるのではないか。

### 赤松委員

学生にとって日本語は、大学に行く生活をするためにはツールとして必要。観光客はそこまででなかったとしても、日本語あるいは京都弁の、ニュアンスの違いや言葉尻には表れてこない感情など、言葉の奥にあるものを何らかの方法で伝えられる工夫ができるとコミュニケーションがおもしろくなっていく。私自身も兵庫県出身だったので、京都に入って戸惑ったことも、なんとなく違いが理解できるようになると、疎外感でなくおもしろさになっていく。単に英語で案内できれば良いというのではなく、そういう日本や京都の情報発信があ

って良いと思う。

### 松井委員

形だけではなく、京都人の考え方やしきたりというものが伝わると良い。アメリカでチップを渡すのも、義務的に思っているが、本来は感謝の気持ちを表すものが形骸化してきてそうになっている。京都でいえば、一見さんお断り。単なる排他的な文化ではなく、馴染みの脚を守るための仕組みであることを理解してもらえると、京都は奥深いと思ってもらえるかもしれない。京都で知ったことを自国に持ち帰ってもらい、それが広がっていき、「シンガポールのチューインガム禁止」のように京都ではこういったルールは守らないといけないのだと意識してもらえると良い。

### 田中委員

デジタルツールが発展する中で、若い世代にとっては「分かりやすさ」も大事なのではないか。京都の暗黙のルールや美学は素晴らしいものである一方、それは空気を読むようなもので「分かりにくさ」を感じる。情報発信、広報、認知拡大をしていくなかで、自分たちの美しさをオープンにしていくのが、これからの時代に必要ではないか。分かりにくさが美しさだったりするが、そこが時代とともに変わってきているように感じる。

### 大井委員

若者と呼ばれる世代は、「京都らしさ」を意識していない、考えることもないのではと感じる。私自身、京都に暮らしているが、こういう機会があつて初めて考えた。京都の一定のルールや仕組みを理解するのは、外から京都に関わる人だけではなく、京都に暮らし、これから京都をつくる世代にも必要なのではないか。

### 田中委員

発信していくことによって、住民にも知ってもらおうという循環が生まれる。

### 松井委員

大学などでも「京都学」などの時間を取って知ってもらうことは十分にできる。

### 曾我副会長

言葉にするのは大切なことだと思う一方で、先ほどの話にあった「一見さんお断り」にせよ、「門掃き」にせよ、京都の人々が体現している文化や関係性といったようなものを言葉で説明して伝えていくのが一概に良いのかとも思う。暗黙知を言語化してこなかったことを反省もしつつ、例えば、学生は実際に京都のまちに暮らしているのだからよく見てほしい、目を向けてほしいと思うし、観光客も長く滞在してもらえれば京都の人の暮らしを目にする機会もあるだろうから、もっと見て感じ取って欲しいという感情もある。

### 杉田委員

京都のまちの未来だけではなく、世界全体で考えなければならない脱炭素について話題にしておきたい。生態系全体で見ると前回の共創チーム会議で

も話題になったが、ドイツ人の友人が初めて京都に来たとき、京都と言えど何をイメージするかと聞くと、ドイツだと京都と聞けば、京都議定書を思い浮かべると言っていた。それが意外な答えだった。京都に住んでいる私たちがどれだけ意識しているかと言うと、セクターにもよるがあまり意識していない。この分野の取組に関して、私自身世界中のまちを見てきたが、京都が特段進んでいるという印象はない。京都議定書がサインされたまちであるという誇りをもって脱炭素社会の実現に向けた政策の議論をしたいと思う。台湾人の友人が京都に来たときにこんなに暑いまちは初めてだと言っていた。台湾は小道があって、街中に自然が多くて、影のデザインがよくできているので、街中を歩いてもそこまで暑さを感じないのだという。一方、京都は道を車が行き交い、歩きにくく、緑がそんなに多くないので、体感として涼しさを感じない。京都の気候や地域性に依拠して、脱炭素の未来に向かっていければ良いと思う。

#### **ファシリテーター**

脱炭素については国レベルの取組のようにも感じるが、暮らしの中でできることもあるのではないかと思う。何か御意見はないか。

#### **赤松委員**

確かそうに思う。イタリアの国際展に行ったが、ペーパーレス化されていて、ガイドマップもない。もちろんチケットもペーパーレスであった。来場者には、どういう交通手段で会場に来たかを尋ね、飲料水は配布せず給水場所を案内するなど徹底していた。世界中から人が集まるイベントで情報発信をして、意識を持たせる、気付かせるという取組だと思う。その場限りではなく、意識を持ってもらう。それぞれがそうした取組を続けていかないといけないという、ひとつの社会教育になっていると感じた。京都はこれだけ人を集めているので、そういうことをやっていくべきではないか。

#### **松井委員**

京都議定書で世界中に気候変動対策を呼びかけたにもかかわらず、未だに対策は進んでいない。その意味では京都がもう一度、気候変動対策に具体的に取組むということまちづくりの1つに入れても良い。小さいことかもしれないが、京都から具体的にアピールしていくのが良い。

#### **ファシリテーター**

京町家の涼しさを観光客に体験してもらうのも方法の1つかと思うが。

#### **伊住委員**

様々な趣向で涼しさを体感してもらうにも限界はある。裏千家の中にもエアコンがない古い建物のエリアがあり、夏は簀戸に変えているが、客を入れるわけにはいかないほど暑いときもあるので、空調の効いた新しい部屋に入ってもらっても少しづつある。夏向きにできているような建築でさえ、健康を害する可能性もあるところまでできているので、もう少し大きな単位で暑さを避ける方法を考えなければならない。

#### **杉田委員**

ヒートアイランド現象への対処の方法もいくつかあるので、まち全体として



取り組みたい。

### ファシリテーター

意見交換の残り時間は5分である。まだ意見が残っている方はいるか。

### 曾我副会長

本日の議論ではあまり経済の話が出ていないと感じている。京都のまちの産業をどうするのか、若い人がなかなか住めないことや、学生が出ていくことに関わると思うが、どういうところで働くのか。京都のまちは文化財だけでできているわけではなく、150万の人々が生活しているまちでもある。そのあたりの意見があると良い。

### 田中委員

中小企業を支援する中で、他都市と違うと感じるのは、利益だけを重視するのではなく、持続的であるかどうかを重視するのが京都独特の文化だと感じる。新卒の給料は都市ではどんどん上がっている。年功序列で賃金が上がっていくのではなく、最低限の金額は新卒から増やせるような都市の価格帯になっているのではと感じる。続くということに加えて、経済面の在り方もアップデートが必要なのではないか。

### 伊住委員

知人の奥さんが、子育てが一段落したタイミングで、縁があって、ある伝統工芸の職人さんのところで働くことになり、そのまま職人になった。その人が言うには、子育てが一段落し手に職をつけたいと考える層がものづくりに携わるルートがあれば、そのルートに乗る人は京都にかなりの数いるのではないかとのこと。後継者を探している職人も多いはず。職人は地域を拠点にしているので、信頼関係も築けて、生涯働いていくということができないのではないかとと思う。子育てなど様々な人生の節目で、一旦キャリア形成を中断した人の中には、前と同じ仕事を続けたいと考える人もいれば、何か新しい仕事をしたいと考える人もいるので、そうした人に京都のものづくりに携わっていただけるようにする仕組みもあって良いのではないか。

### 田中委員

事業承継の新しい形も、京都なら実現していけるのではないかとと思う。

## Cグループ

### グループ構成

#### <京都市総合計画審議会>

安保 千秋 副会長  
小川 さやか 委員  
榊田 隆之 委員  
貫名 涼 委員  
濱崎 加奈子 委員

#### <京都市未来共創チーム>

大竹 莉瑚 委員  
田口 成人 委員  
都地 耕喜 委員

### 田口委員

私自身は建築技術職で、景観の部署にいたことがある。景観まちづくりの団体の方と関わっていたときには、同世代はあまりいなかった。これからの公共、まちづくりを考えた時、同世代がそういうところと関わるにはどうするべきかを考えるようになった。一方で、同世代でも動き始めている人が増えていて、まちづくりも多様になっており、それをどう拾い上げていくかに興味がある。そういった人たちが京都で生活していくことを考えたときに、消費の在り方や観光など、誰がどういう負担・役割を担うかを考えながら第1回未来共創チーム会議では議論した。

### ファシリテーター

多様な価値観を拾い上げていきたい、そのような方々とつながりを持っていきたいという中で消費の在り方、まちの在り方を考えていきたいと思う。

### 大竹委員

第1回未来共創チーム会議の議論において、「無計画をデザインする」ことについて発言した。決めない中でできたものが京都らしさではないか。正しい姿、理想を決めて目指していくより、そこにある人々や、東京などのメインカルチャーに対抗していく風土の中から京都の雰囲気を作られていると感じる。

「らしさ」に対してネガティブ。例えば、女性らしさや男性らしさは、生きにくさにつながる。「らしさ」を議論するのは難しい。結果的に出てくるものであって、定義づけするものではない。それをすると個人がいきいきと生活できるまちになりにくいので、定義しすぎない、理想をあまりにも肯定しすぎないことも重要な視点と思っている。

### ファシリテーター

大竹委員は日々様々な人と交わっておられるので、人々の今ある主体性をいかしたいともおっしゃっておられた。人の創造性を阻む枠のはめ方を「らしさ」で議論したくない。京都ならではの価値観を土台にしていきたい、改めて再定

義することは意義があることとして議論を進めていきたい。

#### 貫名委員

類似の都市がたくさんあり、京都は特別だと思い込んでいるのが良さでもあり悪さでもある。世界歴史都市会議も毎年続けているが、何が歴史都市の中で課題や強みになっているかは共通性がある。モビリティの話や住環境など共通課題がある中で、それに加えてそこにはない部分が京都にある強みであり課題。特別視は良いが横の部分も見ていくこと。「世界の人に誇りをもってもらう」はどういうことか。問いは掴みづらいが、結局前回の総合計画になくて今ある視点が世界を見てのもの。ざっくりとした世界、曖昧な言葉でなく、歴史都市の中で考えていく。そうすると整理できる。

#### ファシリテーター

世界を見ていることが前回とは違う。世界との交わり方は未来共創チーム会議では観光の話が多いが、世界文化自由都市宣言は、より文化交流的な意味合いが含まれると思う。そのあたりいかがか。

#### 貫名委員

漠然と世界というと、近隣の東アジアからの観光客も含まれるし、遠い欧米の人々も一絡げに含まれてしまう。歴史都市を見ていると観光の話は共通。もっと言うと戦争、移民問題の大きなことに悩んでいるところもある。京都はそういうことからフリーにみられている。そこを今この場で議論する必要がないのはアドバンテージ。そうすると都市が絞れてくる。

#### 都地委員

京都は文化的な面、建物もそうだが、戦争の被害を受けていないため保護されている。保護することが悪いことではないが、文明が発展するとき本来は変数であるべきところが定数であると感じる。例えば、産業においても新しいものを根付かせていかなければいけないが、これまで定数であったところを変数的に変えていかなければいけない。どこが定数で変数かは分からないので、議論していきたい。

#### ファシリテーター

活動されている中でこれから力をいれていくべきところは。

#### 都地委員

ライフサイエンス寄りにはなるが、コロナのワクチンにおける安全保障は身に染みて体験した。日本の現状は、CDMOと呼ばれるワクチン製造拠点や研究施設が不足している。パンデミックが起きた際も、日本は拠点がなかったために海外に頼らざるを得なかった。京都は、京都大学などバイオ・ライフサイエンスの神髄が生まれているので、成長や将来的な安全保障において製造拠点を確保できる場所が必要。

#### ファシリテーター

これからの災害や未曾有の事件に対してどう対処するのか、その体制をまちとしてとるべきではないかということだと思う。

## 安保副会長

2050年がどのような未来になっているかは、年配の者からは想像がつかない。社会の変化をみると、残念な面と期待する面の両面がある。期待する面を伸ばし、残念な面も皆で一致して克服していくことが必要。価値観が多様である中で、こうした視点を持って議論していきたい。京都は余白があるとのことだが、私も京都には独特の間、余白があると思う。それは京都のまちがつくってきたもの。間は余裕でもあり、何かを残していくほかにない雰囲気。まちに目を向けると、壊れているところは壊れているが、遺っているところもある。京都に来て自由な感じがするのはそれがあから。それを今後どう遺していくかを考えていきたい。

世界の観点から見ると、世界的に次の大戦が勃発するのではという危機感がある。現時点では定かではないが、後から考えれば、現在が次の大戦が引き起こされるまでの中間地点にいるのではというような危機感である。京都は第二次世界大戦の影響は小さいが、都であったため歴史上は幾度も戦争を経験している。例えば、応仁の乱や蛤御門の変でまちが焼けたが、その中で人々はくらしを続けてきた。観光だけではなく、人の生活を基盤にした平和を発信できる都市ではないかと思う。

## 榊田委員

一言で京都を語るのは難しい。歴史都市であること、歴史の年輪があって、文化が出てくる、それは京都に住む人間が無意識の中に意識している京都らしさではないか。大阪や東京は消費社会で、モノが中心の社会。京都は、精神的とまでは言わないが、スピリチュアルなもの、心を大切にしている。それは歴史があり文化があるからだ。それが世界からも注目されている。大阪にはUSJや道頓堀を目的で来るが、京都にはスピリチュアルなものを求めて来られる。それが間や風情、雰囲気である。観光客のみならず、京都市民も意識しているが、それは空気のように曖昧なので表現するのは難しい。2050年に京都が世界から憧れをもってもらうには、京都らしさをいかして伸ばしていく必要がある。人と人との、都市としての空間を「場」として大切に交流を促し、消費ではなく、共感やスピリットでつながるようなまちづくりを常に心がけ、それが行政指針や人々の行動、経済活動にあらわれてくると良い。京都はコンパクトシティだが他とは何か違う、それが最終的に、人を惹きつける力になる循環を生み出すクリエイティブな都市を目指すことが、私が思い描く2050年の京都である。文化的であるということは、人を中心として関係性を深めること。伝統工芸や芸能がよく文化といわれがちだが、最大の文化的都市とは、人と人との心でつながり、ソーシャル民度が高い都市。人を思いやる気持ちが高いまちになると良い。

## 濱崎委員

余白の創出という考え方は面白い。空間としての余白は、それが具体的にどういう場所か考えたとき、自然、川や神社・寺の役割は大きかったのでは。現在、それらは観光という尺度で考えてしまっているが、そこには本来の役割や

多様な価値観があり、それが自由や、ときに逃げ場を生み出していたのでは。

今回の問い「京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらうまち」について、「世界の人に誇りをもってもらう」というのはどのような意味か。世界の人に京都があることを誇りに思ってもらうことか、あるいは、京都市民が誇りに思い、世界の人に愛され憧れをもってもらうことか。

問いに関する意見として挙がっている、「憧れよりも親しみをもってもらうことの方が京都らしさではないか」という意見もおもしろい。ごもつともと思う一方、憧れも重要。憧れは、外の視点を常に持っており、客観的な視点が複眼的に常にある。「見る・見られる」の関係が常にある。これは生活の基盤としての平和につながるのでは。例えば、お茶の世界では見る人と見られる人が同居しており、どちらも見る一方ではない。交換可能な関係が常にある。それは踊りの世界でも接客の世界でもある。それが正しい批評精神や正しいマナーを生む。それは入れ子構造で大きな世界も小さな世界もある。緊張関係としての外側でなく、親しみも内包しながら、遠くて高くても素敵な関係性としての外の視点があるということかと思う。「間」は生活の知恵として京都が生み出してきたものと考えさせられた。

#### ファシリテーター

見る・見られるが京都においての秩序ではという議論が第1回共創チーム会議でもあった。

#### 榊田委員

問いを直した方が良い。濱崎委員の整理の方が正しい。早い段階で直した方が良い。

#### 濱崎委員

京都市民が誇りを持って、世界の方に愛され憧れを持ってもらうことではないか。

#### ファシリテーター

問いの構造は再検討する。

#### 小川委員

京都らしさは事後的なものと思う。世界が同じような都市になっていく中で、京都は神社仏閣だけでない京都らしい風景、風情、精神性が担保できているのは、京都人の知恵があるからではないか。私の院生が京都のお茶の研究をしていたとき、文明開化の時に「都をどり」を発明したという話をしていた。もともと京都の舞妓さんや芸子さんの舞は座敷舞で、「都をどり」のように、みんな魅せるような踊りはなかった。文明開化時に欧米が手を突っ込んでこよとしたときに、うちは芸のまちです、と欧米のラインダンスを取り入れ、芸を魅せることで、本当に突っ込まれたくない京都の深い部分には突っ込まれないようにしたというのも強かな知恵だと思う。お茶屋さんで隙間風が吹いて寒いと話した時、女将さんが「寒いでしょ。うちは創業〇〇年なんです」とさらっと歴史があるという方向に話題を変えることで、隙間風を我慢するのも風情とするなど、強かな知恵によって新しいものを取り入れつつ、自分たちが大切に

したいことには手を付けさせない二面制のある戦略を駆使してきた。まちのジェントリフィケーションが進むと出てくる隙間や空き地を、上手に外の人たちに活用してもらいながら、店の奥にいれることはしない。大切に守るものと、流動させていくところを上手に使い分けているのが京都の知恵。ともすれば、世界的に同じような都市がどんどんでき、箱モノが並ぶ郊外のまちになってしまう。神社仏閣や文化が数多くあるからと放置していると失われてしまうので、どのようにレジリエンスを高めるか。昔から続くものを遺しつつ、新しいものを上手に活用して進めていけるかが世界にとっての唯一無二の京都にしていくために重要。

#### 田口委員

議論を聞いていて、内と外を分ける境界線のことを考えた。25年前と比べたときに、状況が大きく変わっている点だと思う。例えば、一般的な人権の考え方などが特にそうだが、25年前は全員がフラットで境界をなくしていこうという傾向が強かったが、今はその考え方に限界が来ている。言い方は難しいが、人には内と外がある。「一見さんお断り」という文化があるが、閉じることで入っていきける、繋がっていきけるという側面もあるのでは。完全に断ち切るわけではなく、入口を設けるために閉じる。平等や違いの考え方を25年前からアップデートしないといけないのではないだろうか。

#### ファシリテーター

違いがあることを前提に、どう受け止め、関係性を築けるかが重要ということか。

#### 田口委員

まちづくりの議論になったとき、とにかくオープンにしましょう、という考え方がしばらく続いてきたが、弊害もある。オープンとクローズを行き来することが京都は得意であり、先進的に取り入れていきけるのでは。

#### 榊田委員

大きなテーマであるが、京都は「一見さんお断り」が象徴的すぎる。今の京都の文化との関連性を語るのにはよく使われるが、それぞれが自分の領域をもち、変に踏み込まないことによりお互いを認め合いながら適度な距離感を持つ程度にしておかないと、京都はどれだけ陰険なの、と思われる。陰険なのではなく、あえて自分の領域をもち、他の人との違いを認め合い、一定の距離をもって関係性を保っているのは京都らしさの一つ。信用金庫の仕事をする中で京都らしいと感じることは、曖昧さの中でぼかしながら存在する境界（バウンダリー）があり、それを良い意味で意識しないといけないまちであること。2050年に向けては、バウンダリーを超えてお互いがつながり合う仕掛けを作っていないといけない。ただ単に領域を意識し、違いを認めるだけでは新しいものが創造しにくくなっている。そういったものをいかにしながら横軸をつなげる人や場、コミュニティの概念がこれからは重要になる。コミュニティの場に来ることによって領域を超えてつながる、可能性が広がる、何かをクリエイトしていく。このような循環を生み出すことが京都の課題であり、チャレン

ジしていくことではないか。

#### 濱崎委員

もう一度、「一見さんお断り」の原点に戻って、境界を作り直すことが必要ではないか。馴染みの客を大切にするという観点から、初めての客を迎えないという考え方であったものが、イメージとして利用しようとする枠組みが過剰に働き、メディアの影響もあって、言葉だけが独り歩きしている事象が生まれている。一方で、SNSなどを通して、守ってきたものが何なのかわからなくなっているという状況もある。境界のための境界ではなく、人と人の間に敬意があれば境界は生まれる。不要な境界はあえて開放しても良いのでは。伝統文化の中におられる方々の苦しみも見てきたので、伝統的なものは守りたいと考えているが、本当に守りたいもの・守るべきものは、囲われている外にあると感じることも多い。大切にすることは何で、遺すものは何か、経済の価値観だけでなく、多様な観点から捉え直すことができれば良い。

#### ファシリテーター

バウンダリーの引き直しが必要で、相手に対する敬意があれば引き直しが可能になるということか。

#### 濱崎委員

「私だけの〇〇」のように、占有するだけでは単なる意地悪になる。意識して開くことも必要。

#### 大竹委員

「らしさ」を意識するのは「らしさ」が失われているということ。失ってから、やっとないことに気づく。だから京都らしさを取り戻そうとしている。まちだけでなく、人についても同様で、自分らしさとはなにか問われることが多くなった。しかし、「らしさ」の表面化は難しい。外の視点、他者との関係性の中で「らしさ」や、その人自身の輝きが出てくるのでは。文化都市として、色々な人が行き来することが特徴。京都は常に、「らしさ」の目にさらされつづけるおもしろいまちだ。

洛西でまちを盛り上げようと活動しているが、地域のおじいちゃんがつくり出す場に行くと、私たちがやろうとしているまちづくりを、すでに30年も前からやっていた。今の私たちの意味づけとは違うが、すでにそこにあった。「実はそこにあった」が京都にはあるのでは。自分たちのまちを自分たちでつくっていくという意識、市民力が高いまちなのではないかと洛西と深く関わっている中で感じている。その風土を制度によってどのようにつくっていくのは難しい。

#### ファシリテーター

市民力は上がっているか下がっているか。

#### 大竹委員

下がっていると思う。自分たちのまちを自分たちでつくっていくという意識がなく、若者の間では責任を負いたくない、責任がネガティブに捉えられている。本当は自分の行動やまちに働きかけられることは、責任に対してポジティブ

ブに捉えて良いことだと思う。自分のまちを自分がつくっていていることを、私はポジティブに捉えている。責任を負いたくない、関わりたくない、行政やインフラに任せてしまいたいと思っているのは市民力の低下だと思う。

#### 榊田委員

大竹さんを見ているとあながちそうとも思えない。確かに一時期はそうだったが、大竹さんのようにいろんな地域をリバイバルしたい、立ち上がりたい若い人は、しばらく前より確実にこのまちに増えてきている。特に若い人の反骨心。洛西の地域の小さなコミュニティだが、大竹さんが行動することによって、地域が一つになろうとしているプロセスが重要。これが小さなペースで生まれ始めていることを実感し、嬉しい。循環型社会は、自然だけでなく人にも優しい。コミュニティマネージャーのようなことをする人が増えてきている地域のソーシャル民度は、コミュニティマネージャーが見られない地域と比べて確実に変わり始めている。これが京都の魅力である。京都から離れるほど、人のつながりをベースになにかをしていこうという動きはなくなっている。市民の自治の考え方は、コンパクトシティとしてかろうじてあって、そこがバランスよく成立する可能性があるのが京都のポテンシャル。大竹さんのような存在にはもっと注目すべきだと思う。

#### ファシリテーター

昔ながらの地域単位のものとしては落ちてきているかもしれないが、新しいユニット、コミュニティ単位が生まれ始めていて、それが新しい市民力の単位なのではということかと思う。

#### 榊田委員

落ちるとこまでは落ちないといけない。落ちた後は力がない。自治をリバイバルしていく。ソーシャルマインドの強い方がコラボして、地域目線で作っていく自治の考え方が重要。そういう意識をもった若い人が増えていることが頼もしい。

#### 都地委員

京都はコミュニティが生まれやすいまちだと感じる。京都で過ごしている人は、人とのコミットメントを大切にするが、そのために人との関わりを制限する人も多い。コミットメントのクオリティを上げたいがために限定的にしている人が多い。ビジネスの面では、マイノリティな人たちが集まってコミュニティを小さく作り、その中でつながりを大切にして相互に成長しているのが見受けられる。京都の中でも企業のコミュニティが生まれている。そこは好きなものを選んでしまえば良い。あえて統合する必要はなく、企業全体の意思を諮りたいのであれば、それぞれのコミュニティの意見を集めていった方が良い。コミュニティが生まれやすい環境の中で市民力につなげていくのかは、一人一人の意見よりかはコミュニティの意見を集めていく見方もある。

#### ファシリテーター

主体性を持っている人がいる中で、そのような人たちは自らつながろうとする力もあるし、新しいコミュニティも実際生まれてきているということか。



## 都地委員

京都はニッチな人が集まりやすい。その人たちが発言し、コミュニティが醸成されている気がする。

## 安保副会長

平等の考え方は、人は多様で一人一人違うため、「あなたは違うからいけない」という扱いをしてはいけないということ。京都の人はそれぞれ個性的で自立しており、多様性が素地にあるのだろう。個人が自立することを大切にし、人格やプライベートに踏み込まないという意味で他人を尊重する。違いを認めているから、京都の文化は守るところは守り、自分の内の部分は尊重してやっていくため、京都はニッチな人が集まる素地があるのでは。その中でコミュニティを作ってきたのは、人としての一定の広がりがあるところ。市民力は大変強いが、時代と共に人の流動性が高まっている。しかし、流動性がないまちは生き残れない。コミュニティをどうつくるかは、仕組みをつくっていく必要がある。京都は学生がたくさんおり、それが良いところ。今まで守ってきたのは、ジェネレーションギャップがなく受け継いできたところがある。ともすれば、若い人と年配の人は対立しがち。お金を持っているのは一定以上の年齢の方であり、そこが主流になり若い人がなかなか活躍しにくいのは一般的にあること。そこを京都としてどう住んでもらうか。京都は学生を大切にすまち。それをどう受け継ぎ若い人が力を発揮しながら、若くない人とも一緒にやっていけるよう、今取り組み始めていることをどう進めていくか。子育て世帯の流出していく理由に、地価が高い、一定の面積で、庭付きの住宅は京都では難しいところがある。人としてのライフスタイルとのニーズと、京都が大切にしているものを組み合わせるかの仕組みが必要。京都は外に出れば御所や鴨川があり、家が狭くても大丈夫と言いたい気持ちはあるが、それでは子育てはしにくい。京都が大切にしているものを守っていけば、子育て世帯は住めないかもしれないが、子育てが終わった人が帰ってきてくれるかもなど、長期的な目線も必要。個人としての生活のニーズと、まちが守っていくものとが衝突する年代があるのかもしれない。

## 貫名委員

2つキーワードを出したい。1つ目は「あそび」。わいわい楽しくの遊びではなく、部品と部品を付けるとき少しゆとりがある状態のこと。「一見さんお断り」も、知らない誰かが来ることに変わりはないが、誰かの紹介であり、知り合い同士なので許容ができる。その中で、全く異質な人がきたらあそびの範疇を超えてしまうため、明確な線引きをしてしまう経過があったのかと思う。

2つ目は「小さなリーダー」。トップダウンかボトムアップかの議論もあるが、京都らしさは小さなリーダー。例えば、祇園祭は大きなお祭りだが誰かが取り仕切っているのではなく、実際はみんな横並びの連合会。太鼓を叩くなら自分、車輪をつける人なら自分、と自分がいなければならぬと思いつつ、祭を運営する小さなリーダーがたくさんいるのが京都らしい。

「あそび」と「小さなリーダー」をまたぐところでいうと、例えば、学生の

枠を超えたところの「あそび」。大竹さんのように地域活動をしようとか、会社員だけど週末はこんな活動をしようとか、本来のバウンダリーをつくったうえで、がたつきの部分をどうかすかが京都として大切なこと。

#### 小川委員

先端的な都市にしたい、環境や災害に強い都市にしたい、子育てや女性、ダイバーシティにやさしい都市にしたいなど、まちが抱える課題はたくさんある。しかし、オールマイティーに全てに対応する都市づくりをやろうとすると何にも残らない。角がとれて丸くなってしまう。まちづくりの事例を見ていると、何かの不便がある。京都で家を買ってなんて狭いんだろうと思うが、道路でみんな話して、路地を楽しむことに発想を変えてもらわなければ、京都のまちなかでは暮らしていけない。多少不便があっても、あるものが好きで住むのがまちの基本。最も重要なのは何を優先して何を優先しないか、そして何かを諦めるよりそれも楽しむ、に変化させること。

共同体の話では、開かれていつつ閉じている、閉じつつ開いているなどあると思うが、メリハリが大切。つながるところはつながり、新しいものは取り入れ、しかし時には閉じたり、閉じたかと思えば開くなど、まちづくりの仕掛けとしてどのように築いていけるか。

#### 濱崎委員

開いたり閉じたりを認識するのは人。線を引いているわけではないのでそれが難しい。言わなくてもそうだろう、と外から来た人も含め、皆がなんとなく分かるのが難しい。建物の保存活動をしているが、ここから入ってはいけない、という竹を置いていても容易に超えていく。入ったらいけないと書いてないのにどうしてダメなのかと逆に怒られるし、矢印を何でつけないのかと言われるが、矢印をつけることで「感じる力」を失うことになるため、絶対にやりたくないと思いやっていない。それを育むのが京都のまちであり、町家をはじめとする和室の仕組み。畳のへり、敷居といったものがあることで、開いたり閉じたりの際の線引きが身体感覚として養われていたのでは。たとえ教えられなくても、そのような空間にいて、ある種の危険管理意識が育まれるのではないか。かつての畳に戻れということではないが、良いところをうまく活用、利用し、身体感覚を育む空間構築を意図的に作る、見直すことができれば良い。

#### ファシリテーター

「育む」ということを広げたい。今、文化的なものや感じる力を育む場は増えていきつつあるのか。京町家が消えていく中で衰えてきているのか。

#### 濱崎委員

私の視点からすると減っている。余白のような場所にしても、使い方を決められていることが多い。かつてはもっと様々な使い方ができる場がたくさんあった。内側の人も外側の人も、空間の用途や価値、料金を一律に決めてしまい、変えられなくしてしまっている。多様な使い方によって空間の価値を見出すことができた。お金がなくても集える、お金がある人はたくさん払うといった考え方もあった。「育む」という視点では、京町家が一日3軒なくなっている状

況や、しかもその状況を知られていないことや、京町家の価値そのものが観光だけでなく文化や人を育む場であったことをみんなで認識したい。

#### 大竹委員

「余白」や「あそび」はどうすれば生み出せるのか。意見を聞いたうえで、自分の中では、人や関係が大きいと感じる。「家族だから成り立つ」、「言わなくても分かる感覚」は、関係性が近いほどお金やシステムを挟まなくても成立する。公園のルールが厳しくなっていくのも、誰が管理しているのか見えなくなり、誰に聞けば良いのかも分からない。若い世代がお年寄りとコミュニケーションをとることが難しいのは、近くにいないから、触れ合う機会がないからだと思う。反対に、お年寄りの方も若い人とどう接して良いか分からないとおっしゃっている。私が住んでいる団地は、御高齢の方しかおられないが、そこに住み、コミュニティを共有することで、お年寄り世代のために、若い世代にできることが分かってくる。これらは勉強して分かることではなく、感じることや一緒に過ごすことで得られるもの。そういうところから「あそび」や、自分のことだけでなく、コミュニティや違うものに対して気に掛ける「小さなリーダー」が生まれていくのでは。

#### 榊田委員

違いを認めるには思いやりが芽生えないといけない。多様性の時代であり、世界中が多様な価値観の中で分断が広がる。京都がリスペクトされるのは、制限を伴うものも含めて、連帯や協働がまちづくりの精神、ベースのルール、住む人の覚悟。京都に住む覚悟。お互いを思いやる気持ちが京都の魅力。外の人から見ても、お互いを思いやるまちというものは魅力的に映る。

#### 濱崎委員

その覚悟は誇りにつながる。

#### 榊田委員

先日、ハワイの原住民と対話した。ハワイは50州ある中で唯一先住民の文化が歴史的に古く根付いている場所で、いまだに本土から来た人と先住民の間にフリクションはあり、ハワイらしさを意識する。そのハワイらしさは、ハワイアンスピリットとしての昔からの人を思いやる気持ちである。これが誇りと言い切る。そして、同じものを京都に感じている。だから我々は京都の人と共感したい、と言っていた。ハワイの人はいまだに日曜日にお寺に行き、お祈りをしている。日本人で日曜にお寺に行く人はほとんどいない。逆に日本よりも、日本のことを意識して守っている。その人からは、京都はそういうことをすごく大切にしている人たちだから京都が好きと言っていた。

長期の目線。京都で商売をする際、100年はひよっこと言われるのは、相手を考え、改良を加え、思いやりをもつことで、長きにわたって信頼される老舗企業になれるから。自分のことだけ考えていても商売は続かない。変化を続けながら、相手の立場を考えるのが京都。信頼関係の時間軸が大変長いのが京都。守りと攻めのメリハリをきちっと考える。相手を思いやる気持ちを商売でも大切にしているから、既存の客を大切に、売り上げなんか伸ばさない、とはっ

きり言う人はたくさんいる。東京からは変人と言われる。

#### 濱崎委員

そういう価値観は若い人でも共有できるものか。長期の考え方は京都の中では崩れてきているかと思っていたが、そうではないのか。

#### 榊田委員

若い人の感性は崩れてきており、ユニバーサル化している。だが、家族を持ち少し熟年に近づいたときに京都の魅力に気づいたり、若い人でも学生時代に京都に来て、生まれ育った地と比べてなにかおもしろいと感じずっと住み続けたりする。

#### 都地委員

京大を卒業し東京に就職しても、京都に戻ってきた人は多い。若い人もつながりを渴望している。例えば、銭湯でも若い大学生が湯船につかり、将来の働き方や恋愛がうまくいかない、など直接的な意見交換ではないがそんな話をしている。

### —— グループ討議まとめ ——

#### Cグループ

##### ファシリテーター

Cグループでは、京都の人が持っている「余白」というキーワードを起点に議論が展開した。人と人が交わっていく中での入り込みすぎない距離感やまちの中にある狭い路地など、時として不便に感じるような空間において人の関係が生まれている。そのような「余白」が京都をユニークにしているのではないかという意見であった。神社やお寺といった場所が、地域のコミュニティを育む場となっていることが、京都のまちの資産として挙げられた。

同時に、そうしたコミュニティが徐々になくなりつつあるのではないかという問題意識も示された。委員の皆様からは、京町家が減少し、人が交わる場も失われていることに対する危機感が感じられた。一方、「小さなリーダー」が、このまちには生まれやすいということにも言及があった。俯瞰だとなかなか見えてこないが、ニッチな分野で多様な人を集めて小さなコミュニティを形成し活動している人が少なからず存在していて、そういった動きをつなげていき、小さなコミュニティを次々に生み出していくことが重要であるとの議論であった。

次に、コミュニティがどういう効果を持つかという点において、「人の流動性」という論点が生じた。子育て世代を中心に人が転出してしまっているという課題はあるかもしれないが、コミュニティや空間に対するロイヤリティ（帰属意識）が生じるように考えていくことで人を根付かせることができるのではないかという意見もあった。

そして最も印象的であった話題が、人に対する思いやりがとても強い空間であるというのである。伝統的な芸事などは、見る・見られる関係性を前提として

おり、そこにあるのは、独りよがりではなく相手からどう見られているかということにも配慮するという精神性である。それが他者へのホスピタリティに結び付いているのだという話であった。そこでは「市民力」というキーワードも出てきたが、人を思いやるという意味での京都の「市民力」は、非常に高いのではないかという議論であった。

そうした思いやりが息づくコミュニティがある一方で、昔ながらのコミュニティは若干衰退気味であり、「バウンダリー」、すなわちコミュニティの境界線の引き直しが重要になっているのではないだろうか。とても小さいコミュニティがあっても良いし、全然違うところとつながるコミュニティもあって良い。格式立ったコミュニティの枠組みを大きく開いていくことも、これからの時代には必要なのではないかという論点が生まれてきた。

「余白」、「人を思いやる気持ち」、そしてそれを育む場というものが京都にはあり、未来に向けた議論においても重要な論点となるという結論であった。

### 安保副会長

本日の議論を通じて、改めて京都の市民が持つ力に感嘆した。個人として自立していることや深みのある人格を有していること、自分を大切にすることと同じように他者を大切にすることといったことだ。また、普段は踏み込み過ぎないが、ときには深く立ち入ることもある、そのような関係性が地域の力になって、様々なコミュニティが形作られてきたのだと強く感じた。

しかし、京都も時代の流れには抗えないところがあり、新しいコミュニティをどうしていくか、京都の人の「市民力」を育ててきたまちをどのようにして保っていくかということは大きな論点だと思う。「まちは人」であり、人を保ち、育てていくことは重要だ。

また、子育て世代の流動性も話題に上ったが、例えば庭のある広い家が欲しいという子育て世代の思いを叶えることは京都では難しく、無理に全てを実現しようとするとうるまひの面白さを損なうことにもつながりかねない。人のニーズは多様だが、ある程度我慢をしてもらわなければならない部分もあり、我慢をしてもらえだけの魅力を京都が持ち続けるためにどうすべきか、ということはこの長期ビジョンが示さなければならないのかなと思う。京都は100年単位でものを考えるような、時間軸のスケールがとても大きいまちなので、その感覚でみると25年間というのは非常に短期間にも感じられるが、京都の時間軸を捉えたうえで、次なる25年間をどのように構想するのかという議論は極めて重要であると感じた。

### Bグループ

#### ファシリテーター

Bグループでは、特に「観光」が大きく取り上げられた。京都というまちや文化が見世物のように消費されているのではないかという京都の内側の目線と、逆に他都市や世界からどう見られているのかという外側の目線のギャップをきちんと正していきたいというところから、まずは京都を知ってもらうこと

が2050年を展望するうえで最も重要なポイントなのではないかというのが議論の出発点となった。

では、何を知ってもらわなければならないかと考えたときに、例えば京都が歴史や伝統を遺すまちであるということに加えて、近代化とどう向き合ってきたのかということを知ってもらいたいという意見があった。例を挙げれば、「都をどり」の際に舞妓さんがお茶を振る舞う「立礼」という文化は、実は近代に生まれたものだが、長く続くことでそれも一つの伝統となっている。ここから言えることは、京都は近代化の流れの中で新しいものをいち早く取り入れ、伝統と巧みに融合させてきた先進都市であるということである。今見えている表面上の京都だけではなく、京都というまちの実態の部分をしっかりと伝え、理解してもらわなければならないという議論であった。これは、世界に向けて京都が誇っていけるポイントなのではないかと考えられる。

また、多くの観光客が訪れることが、ひいては京都市民が大切にしている文化財などを守ることにもつながっているのだということを市民に伝える仕組みが重要であるという意見もあった。こうした点は、観光客との関係構築を考えるうえで大変重要なポイントなのではないか。

続いて、京都を更に深く知っていただくことについての議論もあった。京都の魅力とは、観光資源は豊富であるとか街並みが美しいという部分だけではなく、暗黙のルールや京都の心構えであるという意見があった。目に見えるものに限らず、作法などに滲む美しさこそが京都の魅力なのだが、デジタル化が進展する中で「分かりやすいもの」が志向されるようになり、理解されづらくなっているのではないかということであった。この論点については、そうした時代の流れの中であっても、京都の魅力を単に分かりやすく伝えようと矮小（わいしょう）化するのではなく、分かりにくい部分も含めて遠慮なく正しく伝えていくことが2050年に向けた重要なポイントなのではないかという結論に至った。

さらにもう一点議論が深まったのが、コミュニティについてである。京都は「一見さん」に対して閉じているような印象もあるが、新しいものを取り入れながらコミュニティとして成長してきているまちでもある。市民が主役であり、コミュニティが主役であるまちでありたいという話があった。

その他、「ベターを目指す」というキーワードもあった。これは例えば、街並みを考えるとき歴史的建造物を一軒パーフェクトに治すより、一軒一軒は「ベター」のレベルで良いので街並み全体の調和を保っていく方が良いのではないかという視点だ。また、最後に議論になったのは脱炭素の取組。「京都議定書」が京都のイメージとなっていることを見つめ直し、京都が行動で示していくべきではないかという意見である。さらに、時間の都合上十分に深められなかったが、働くまちとしての京都の魅力という点も、論点としての提示があった。

## 曾我副会長

グループ討議のまとめはただ今のおりであるので、ポイントとなるところ

を二点申し述べる。一つは、近代化、あるいは西洋化していくことを、京都がどう受け止めてきたのかということである。経済一辺倒や効率重視ではなく、様々なものを取り入れ、混ぜ合わせてきたのが京都だという議論だったかと思う。近代化やグローバル化の波を最初に経験した日本という国の中でも先端を行く都市として、どのようにして今の京都が形作られたのかを伝えていくことには意義がある。同時に、未来に向けてどのような京都をつくっていくのかという議論も重要である。地球環境や経済が論点として挙げられたが、やはり経済抜きに議論することはできないので、こうした論点をどう組み合わせしていくのかということが重要だ。京都には京町屋をはじめとするストックが十分にあるが、今あるものをどのように活かすのかという点がポイントになるのではないかというのが、私が補足したいことの一点目である。

広い意味で学生さんなども結局は京都に来てくれた人であり、観光客もそう。京都に対するアプローチの仕方や時間軸の違いはあるが、色々な人が入って来ているということであり、京都はそれを受け止めてきた。しかし、単純に何でも受け止めてきたわけではなくて、京都の暗黙のルールというのか、京都の人が大切にするものとの境界を設けて受け入れてきた。今改めて考えると、そうした境界や暗黙のルールを我々の側からきちんと伝えてきたらどうかと思うところがある。今後も京都は多くの人を訪れるまちであり続けるだろうから、そうしたことまできちんと伝えたいというように、包摂の在り方も考えていかなければならない。これが二点目である。以上だ。

## Aグループ

### ファシリテーター

Aグループでは、最初の視点として、住んでいる人が住み続けたいまち、どのような人でも暮らしやすいまちとはどういうところかということから議論をスタートした。前提になるのは、検討の視点は様々だが、京都市民が愛するまちになるために必要なものという視点が最初のテーマとなった。

議論する中で課題として表れてきたのは、子育て世代が住めないまちになっているということや、せっかく多くの学生がいるのに就職の際に京都から出て行ってしまおうといったようなことであった。また少し話題が変わるが、循環型社会や自然災害というテーマでも議論した。自然災害が頻発する中で住み続けたいまちであるためには、地球環境にもきちんと向き合っていかなければならないという課題意識であった。

特に印象的であったキーワードとして、京都らしさや京都のまちの魅力として、「伝統と革新の共存」というものがあつた。その矛盾が京都の魅力であり、京都市民はもとより、これから住みたいと思ったださる可能性のある方々にきちんと伝えていくことが重要なのではないかということであった。その中で一つ議論が展開したのが、「入口を探すのが難しい」ということについてだ。実際に足を踏み入れると京都にはつながりを大切に人が大勢いてそれが魅力であるのに、入口を探すのが難しく入ること自体が難しいので外からはそ

の魅力を分かってもらえない。このギャップを解消するためにいかに入ることのハードルを下げられるかが一つ大きなポイントになるのではないか。ただし、入口を広げすぎると今の京都の魅力を保てなくなる可能性もあるので、入口をいかにして見つけるかというところも京都の面白さとして残しておくのが良いのではという議論であった。

町内会のアップデートや2050年に向けてまちのつながりをどうつくっていくかというテーマでも議論が盛り上がった。高齢世帯が増えていく人口構造の中で、町内会に若い人が参加できるようにすることや、子育て世代も参加し続けられるようにするためにどうアップデートすべきか、という点も議論として盛り上がった。方策の一つはSNS。地域とのつながりもSNSで大体完結する社会になっているからこそ、若い人たちにとっては町内会などの直接のコミュニケーションのハードルが高くなっているのではないか。SNSをうまく活用しながら町内会もアップデートしていくことも必要なのではないかという意見があった。今は、そうしたアップデートの「過渡期」であるという見方もあった。

最後に「余白」があるまちづくりについてはAグループでも話題に上った。余白があると、それぞれがリスペクトを持って文化や人を許容できる。そのようなまちづくりが理想であるという議論であった。

#### 宗田会長

まとめていただいたとおりで、確かに子育て世代がと住み続けられない、学生が全国から大勢集まるにもかかわらず、京都で就職できないという課題などを議論した。コミュニティに関する議論もその通りだと共感しながら聞いていた。議論の中ではキーワードとして「過渡期」や「コスモポリタン」というものが出た。京都は決して閉鎖的な町ではなく、外国人も住みやすいまちである。その仕組みは何だろうというところから、「入口」の議論になった。

今、京都の社会自体というか、日本の社会自体が大きな「過渡期」にあって、家族の形や地域のつながりも変化している。おそらくその過渡期を、京都の伝統と革新の共存によるエネルギーをもってどう乗り越えていくかということが重要なポイントになるのだと思う。例えば、町内会などのコミュニティではSNSを使った取組が始まっているという話があったが、徐々にそうした大きな変化が起こっているので、若い人や一人暮らしの人ももっと地域コミュニティに入りやすくなるのではないかという期待にもつながる。

だから次の25年の間にどういう大きな変化が起こるかということを見越しながら、柔軟に革新を続けていくということが課題かと思う。過渡期をどうコスモポリタンの精神で乗りきるかということかと思って聞いていた。



## 宗田会長

ただ今のグループ討議で議論した内容については、この後実施する第2回京都市未来共創チーム会議において振り返りを行い、その後事務局が整理して、長期ビジョンの骨子及び草案作成にいかしていただく。少し感想を申し上げますと、こういう席を御用意いただいた事務局の妙だとは思いますが、他のテーブルを見ても、未来共創チーム会議の方たちと審議会のメンバーが、とてもよく話ができたとする。最初は年代も違うし大丈夫かという心配もしなかったわけではないが、こういう世代を超えた話し合いができたことはとても良かった。決して一回だけではなくて、もっとこうした機会があればと思った。我々審議会委員の立場からも伝えたいところがきっとあるだろうし、若い方ももっと我々に言いたいことがあると思う。

私が所属したAグループの議論でも申し上げたことだが、おそらく大きな過渡期をどう乗りきっていくかということが、我々の大きな課題になっている一人暮らしの方が増えている状況で、昔ながらのコミュニティを維持していくことが、様々な意味で困難になっている。その一方で本当にコミュニティを必要としている方が大勢いて、防災の問題であり、社会福祉の問題でもある。そこに我々自身が柔軟に対応していくことが求められている。そのうえで、我々が伝統をどう継承していくかという議論もしなければならぬ。コスモポリタンということ先ほど申し上げた。これだけインバウンドの方が増えてきて、観光のまち・京都の側面が強くなってくると、それは第一義的には観光公害ではあるが、その人たちに、京都の価値、京都の文化をどう伝えていくかということが重要な課題になり、できれば京都の価値を分かって、共感して、共有して、憧れを持っていただき、さらにその先に京都を支えるメンバー、京都の新しい市民という形でかかわっていただくような、そういう開かれた社会をどうつくっていくかということだろう。その意味で、京都は常に変革し、それが1200年続いてきたわけである。人口が減少した時期もあれば、急増して新しい層が京都に移り住んできて、京都に混乱をもたらしたこともあった。その都度しぶとくとか凶太くとか、京都の人たちは柔軟に自分たちを変えることをしながら、京都を守り続けて京都を発展させてきた。その意味で「過渡期」という言葉を取り上げた。京都は今過渡期にあり、そこを我々が知的にどう整理していくか。どう理解して、それを多くの市民の方たちと共有しながら、我々のコミュニティであったり、行政の仕組みであったり、それから時間の使い方の話も出ていたが、職場と家庭というだけではなくて、第三の場としての社会活動、地域コミュニティももちろんそうだし、NPO、NGOもそうだし、福祉や色々なボランティア活動もあるが、そういうところで時間をどうシェアするかということも大きな課題だ。そういうことを含めて、柔軟に市民生活をリードしていくこと。市民自身が自覚しつつ、喜んで自分を変化させていくことができるような、新しい京都をつくっていきたい。

本日のような議論をもう一度やりたいと思うのは、皆さんが理想に燃えているからである。他の自治体の基本計画審議の席でこういうテーマで話すと、少

し恥ずかしくなるというか、理想主義的ではないかという雰囲気になる。理想を堂々と語れるということが、流石は京都市民だと感じる。京都市民はすごく現実的などころもあるからそう一概にも言えないが、何か共通の理想、京都のまちのあるべき姿のようなものを探しながら、これだけ真剣に若い人と一緒に話せるということは実に素晴らしい。世界文化自由都市宣言を継承しつつ、次の25年の世界に向けて、京都がどうあるべきかということ、京都の文化、芸術などを通じて世界に示していく議論ができたことは大変な喜びだ。そういった意味で、また若い力をお招きして、こういう議論ができると良い。

## 岡田副市長

京都市総合計画審議会及び京都市未来共創チーム会議の委員の皆様におかれては、大変中身の濃い御議論をいただきが感謝申し上げます。それぞれのグループで非常に活発な意見交換が行われていたと思う。本当は私もどこかに入って意見交換をしたかったが、本日は少しずつ聞かせていただいた。まず、市長は本日からの海外出張で欠席させていただいているが、出席できないことを大変残念がっていた。皆様にくれぐれもよろしくお伝えするようにと承っている。

実際に議論に参加したわけではないので本日の議論をまとめることはできないが、せめて私自身のことを少し話したい。私は生まれも育ちも京都市の左京区で、京都から出たことがない。幼い頃から吉田山と鴨川が遊び場で、走り回って遊んでいた。この長期ビジョンの策定に当たり、策定方針には「京都らしさ」や「京都ならではの」、あるいは「京都独自の思想・価値観」といったことを書いているが、それはすなわち皆様の多様な価値観や京都に対する想いの擦り合わせなのだとは私は思っている。ただ、それは、決して京都はこうでなければ駄目だという固定観念ではなくて、京都はここに拘る、だから京都に関わる方も理解し尊重してほしいと言いながらも、様々な価値観も互いに認め合う、理解し合う。少なくとも邪魔をしない、排除しないということなのだと思う。価値観というものは、実は私という一人の人間を見ても、六十数年で変化している。大きなきっかけは都市計画局で嵐山の交通渋滞の対策や観光と市民生活の調和に取り組んでいたころだ。次に本日の議論にもあった京都議定書が発効した時で、当時私は環境局の地球温暖化対策室の課長であり地球温暖化対策条例を作った。また同じく環境局にいる時に家庭ごみの指定袋の導入にも関わった。今ではお馴染みの黄色い袋だが導入の経過では大騒動になったのを覚えている。現在は副市長をしながら、京都のいろいろな文化財、神社仏閣を回り御朱印を集めたり、登山が趣味になって山歩きをしたりしている。振り返ると、「自分はこんな人間だったか」と思うほどに価値観が変わった。一人の人間の中でも時とともに価値観は変わると実感したという話である。本日は多様な世代の方にお集まりいただいているが、こうして混ざり合いながら、京都はこうだという部分と、多様な価値観を尊重し合いつなぎ合わせていくという部分の双方が京都であると思っている。本日の議論を無駄にすることなく、できる限り反映したい。今後も忌憚のない御意見を賜りたい。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます、御礼の言葉とさせていただきます。

## 宗田会長

観光交通もごみ問題も地球温暖化問題も本日話題に出ていたが、これまでのこともきちんと踏まえたうえで、審議会としても議論を続けていく。それでは事務局に進行をお返しする。

### (4) 事務連絡

## 司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第2回京都市総合計画審議会を閉会する。

## 3 閉会

(以上)